

◆次の【I】・【II】は、それぞれ「何のために、どんな労働をするか」ということについて書かれた文章である。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

〈山梨改〉

- 【I】
- ① 労働力を商品と考え、それに価格をつけたものが、いわゆる労働賃金である。労働力という商品は、時間という単位で売買されるため、賃金対労働時間の関係はこれまで、たえず問題にされてきた。だが、それらはすべて、商品経済の枠の中に、人間の労働を押し込んで、商品経済的に人間の労働を処理しようとする方法である。
- ② しかし、事実としては、抽象的な労働時間とか、抽象化されたX円という価格では処理しきれない、**A**な労働そのものがある。労働は人間の活動であり、人間の生活や意識や感情と一体のものであることを忘れてはならない。何のために、どんな労働をしているか、ということぬきに時間と賃金だけで労働を処理することはできない。
- ③ アンドレ・ゴルトは、『エコロジスト宣言』で、生産技術の発展は労働量を減少させるものなのに、資本家や政治家は、その余暇を労働者に分配しなかったことを批判し、労働時間の短縮と、可能な限り多くの自由時間を人びとが持てるようにすることが、よりよく生きることへの解放の道だ、とのべている。
- ④ **B**、そのゴルト自身も、「労働の廃絶はそれ自体としては解放ではない」と認め、本当は、人間と労働との関係を、人間生活の方から考えなおさなければならぬのだと言っている。

15

10

5

〔註〕*解放⇨東縛を解いて自由にする。解き放つこと。
*廃絶⇨やめて行わなくすること。なくすこと。
*能動性⇨進んではたらきかけること。

【II】

① 労働についての諸外国との意識比較をみると、日本の人々の多くは、他の国の人々より自分の仕事に熱心なようである。確かに、私たちのまわりの人々も、時間がきたからといって、仕事を中途でやめたりはしない。なぜそういう気質が日本人々にはあるのだろうか。それは、仕事とともに展開する「自分の世界」のなかに、大事にしたい何かを感じているからではないだろうか。

② 十年ほど前、四万十川の流れる四国の村で、「火振り漁」につきあわせせてもらったことがあった。四万十川には、いまでも専業、兼業の川漁師たちがいる。めずらしい昔からの漁法も残されていて、火振り漁も、夏の鮎漁としてつづいてきた伝統漁法のひとつである。

③ 夕方に、山の集落の人たちが出てきて、川の一面に自分のサシ網を張る。その日の四万十川の様子をみながら、どこに網を張るのが最初の腕のみせどころである。夜暗くなるのを待って、人々はいつせいに自分の川舟に乗り、タイマツを振りながら、鮎を自分の張った網に追い込んでいく。真つ暗な川面に、タイマツの炎と火花だけが駆けめぐる、勇壮な漁である。朝陽が昇る頃、人々は自分の網を川舟に引き上げる。その網に鮎がかかっている。火振り漁は、サシ網漁でもあり、タイマツを使った追い込み漁でもある。

④ それは、一面では、四万十川とともに生きる人々の労働であった。私はこの地域の漁協の組合長さんの舟に乗せてもらったのだけれど、網には百匹を超える鮎がかかっている、その大半は「四万十の鮎」として

10

20

⑤ もし労働よりも自由時間の方が長くなれば、人生にとって労働が支配的価値となることをやめるだろう。労働は、人間の目的ではなく、生きるための手段になるだろう。つまり職業は、その人の多くの活動の中の、ひとつの活動であるにすぎなくなるだろう、という。

⑥ もし、豊かな人生を生きて、という発想からすれば、「ゆたか」とは、人びととの共存、自然との共存をひろげていくような労働を意味する。エーリヒ・フロムは、それを、人間や未来にたいする思いやりと連帯のための能動性だと言っている。

⑦ そう考えてくると、私たちは、労働時間の短縮、つまり自由時間の増大だけではなく、労働のあり方を変えていくことなしには、豊かな生活はありえない、という課題に到達する。つまり、生活の中の労働と、社会的な労働を統一する必要にかられる。

⑧ 生活とも、地域社会とも切りはなされ、消費のたのしみもなく、あるいは営利企業に組織されたレジャーのたのしみで、自分自身がふり回されている。そういう生き方から、そろそろ私たちは脱却すべきではないのだろうか。

⑨ 私たちは、本当は労働時間の短縮だけでなく、労働のなかにも豊かさを体験したいと望んでいるのではないだろうか。そしてその欲求は、社会全体の流れを変えることなしには、実現できないことを知っているゆえにこそ、まず手はじめに、労働時間の短縮をねがい、人間らしい生活をするゆとり、思考するゆとり、感じるゆとり、地域社会を作っていくゆとり、政治参加の時間を持つゆとり、を得ようとしているのだと思う。

40

30

25

出荷される。漁師さんたちは、自分のプライドをかけて技を競う。網を張る場所、張り方、川舟のあやつり方、タイマツの使い方、そういうもののひとつひとつに、経験にもとづいた技がある。そして、そういうこともふくめて、この労働のなかには遊びの要素もふくまれている。労働と遊びとが分離していなくて、徹夜で働いたような、徹夜で遊んだような感じである。

⑤ もうひとつ面白いのは、この漁がもっている個人と共同との関係である。いつせいに舟を出して、共同でおこなわなければ、この漁は満足な成果をあげることができない。みんなで横一線になって追い込むから、鮎は網に導かれる。ところが、にもかかわらず漁は一人一人のもので、村人は自分の網を張り、共同であることを逸脱しないようにしながらも、自分の網に鮎を追い込んでいく。とれた鮎を一カ所に集めて、再分配するというようなこともしない。

⑥ この個人と共同との関係は、伝統的な村のあり方そのものでもあった。村の労働は、基本的には一人一人のものである。村人は自分の田畑を耕し、それぞれが自分の仕事をしている。ところがその背景には、つねに共同の世界が存在する。共同の水管理、共同の道普請、共有林の共同管理、さまざまな助け合い。そういう共同の世界を背景にもっているからこそ、一人一人の仕事も成り立つのが、村の労働のかたちである。

⑦ 私たちの記憶の底には、このような伝統的な労働のあり方が残されているような気がする。だから労働は、単なる生活や物づくりの手段ではなく、自分の生きる世界そのものと重なっていた。遊びと分離できない労働、楽しみと分けられない労働があり、個人と共同とが微妙なバランスを保つ労働の世界があった。労働は自分だけでは成り立たない。といて、他人のために働いているのではない。日本人々は、自分の労働のなかに、人間の根元的なあり方が示されていると感じた。

◆次の文章【I】は、松尾芭蕉「おくのほそ道」の一節、文章【II】は、文章【I】についての解説文、文章【III】は、松尾芭蕉の文学や生き方について述べたものである。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

〈岡山改〉

【I】
那須の黒羽といふ所に知人あれば、これより野越えにかかりて直道をゆかむとす。はるかに一村を見かけて行くに、雨降り、日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くればまた野中をゆく。そこに野飼ひの馬あり。草刈る男になげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬにはあらず。「いかがすべきや。されどもこの野は東西縦横にわかれて、うひうひしき旅人の道ふみたがへむ、あやしう侍れば、この馬のとどまる所にて馬を返し給へ。」と、かし侍りぬ。小さきもの二人、馬のあとしたひて走る。一人は小娘にて、名を「かさね」といふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし 曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍つぽに結びつけて、馬を返しぬ。

(松尾芭蕉「おくのほそ道」より)

【II】*野越えにかかりて＝那須野越えにかかつて。

*直道＝近道。 *はるかに＝遠くに。

*見かけて＝目指して。

*明くれば＝夜が明ければ。

*野飼ひ＝放し飼ひ。

鄙には不似合いな「かさね」という雅な名前。『伊勢物語』の冒頭部、狩りに来た男が寂れた古里に不似合いの優美な姉妹に偶然出会うエピソードが思い出されます。ミスマッチが輝かす雅です。日常では出会えない、どきどきするような旅の醍醐味です。

実際の芭蕉は、曾良を伴っての二人連れのはずです。曾良も子どもたちと一緒に、小走りに後をついてきたのでしょうか。ここでは、そんな現実の細部はそぎ落として、旅の気分が盛り上げられてゆきます。

フィクションであろうとなかろうと、事実の奥に真実を見ようとする芭蕉の心には、旅先ならではのシーンとして那須野の風景はクローズアップされたのでした。

(佐佐木幸綱「芭蕉の言葉」おくのほそ道」をたどる」より)

【III】*下キユメント＝記録。

*曾良随行日記＝『おくのほそ道』の旅に同行した曾良の旅日記。

*アレンジ＝脚色、作り変えること。

*馬方＝馬を引く職業の人。

*掛詞＝和歌などにおける表現技法の一つ。同音異義語を利用し、一つの語に二つの意味を持たせるもの。

*鄙＝都から遠く離れた土地。いなか。

*伊勢物語＝平安時代の歌物語。

*ミスマッチ＝不釣り合いなこと。

【III】『笈の小文』の中に、芭蕉は旅について、次のように書いている。

旅に出て、その土地それぞれにゆかりの古人のことを思い、絶景を眺めては造化の神の見事なわざに感心する。かごに乗るかわりにゆっくり歩き、腹をすかして食事をすれば何でもうまい。その日のうちにどこまで行かなければならないということもなく、朝はいつ出発しなければな

*野夫＝田舎の男。
*道ふみたがへむ＝道を間違えるでしょう。
*あやしう侍れば＝気がかりです。
*かし侍りぬ＝貸してくれた。
*名のやさしかりければ＝名が優雅だったので。
*曾良＝『おくのほそ道』の旅に同行した芭蕉の門人。なお、この曾良の句は、芭蕉が作った可能性もある。
*鞍つぽ＝鞍の真ん中の、人が乗るへこんだところ。

【II】

『おくのほそ道』はドキュメントではありません。文学作品ですから、実際の旅とは随分違ってきます。『曾良随行日記』を参照すると、『おくのほそ道』が、訪ねた先の順番を替えたりフィクションを入れたりなどして、事実をアレンジしていることがよく分かります。フィクションだろうと言われているのは、旅ならではの牧歌的体験を記した那須野の一節です。

馬方なしに馬なりに広大な草原を渡って行く。小さな子が二人、馬の後を走ってくる。映画の一シーンのようですね。代金を鞍につけて馬を返す。都市生活では思いもよらない、旅ならではの牧歌的体験です。

花の名前「撫子」は、古典和歌では「撫でし子」との掛詞として盛んにうたわれてきました。「撫でし子」とはつまりかわい女性の意味です。「撫子＝可憐な女性」のイメージを、和歌史は何百年もの時間をかけて育て上げてきたのでした。この句はそのイメージを踏まえています。

らないということもない。ただ一日に二つのことだけを願っている、今宵はいい宿を借りたいということ、自分の足によく合ったわらじがほしいということ。旅にあれば一日一日が新鮮で、もしわずかに風雅の心得のある人に出会っただけでも大変嬉しい。ふだんだと古めかしく頭がかたいとして嫌うような人でも、辺鄙な土地の道づれになって語り合うと、思いがけないところで貴重な宝物を得たような気がして、ものに書いたり、人に話したりしたいと思う。それも旅の楽しみの一つである。

これが芭蕉の望む旅である。実際の旅はなかなかこうとばかりはいかない。つまりこれは、いささか感傷的な空想の旅である。そして『おくのほそ道』は、もともと空想の旅に近付いた作品だといっている。虚構があつて当たり前なのである。

(山下「芭蕉の世界」より)

【III】*笈の小文＝『おくのほそ道』に先立つ芭蕉の紀行文。

(1) 【I】の文章中に——線①「さすがに情しらぬにはあらず」とあるが、「情しらぬにはあらず」という芭蕉の判断はどのような出来事に基づいているか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 捜していた馬の持ち主を、男の厚意によって見つけ出すことができたこと。

イ こちらの頼みごとに対して、男がことのほか親切に対応してくれたこと。

ウ 困り果てている男に対し、何もせずにそのまま見捨ててしまったこと。

エ 男が、こっそり盗んだ馬を返し、盗んだことを素直に謝ってくれたこと。

- (2) 【Ⅰ】の文章中にある——線②「あたりを鞍つばに結びつけて、馬を返しぬ」について、次の各問いに答えなさい。
- ① どうしたということか。現代語で三十字以内で書きなさい。

- ② 芭蕉はどうしてこういうことをしたのか。このときの芭蕉の気持ちを十五字以上二十字以内で書きなさい。

- (3) 【Ⅱ】の文章中に——線③「事実をアレンジしている」とあるが、【Ⅰ】の文章の筆者は、【Ⅰ】の文章を表現するための「アレンジ」を施した際に芭蕉が行ったと考えられる操作について、どのようなことを指摘しているか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を、【Ⅱ】の文章中の言葉を使って十五字以内で書きなさい。

芭蕉は、実際の曾良の行動の様子など、表現に不必要だと考えた□ということ。

書いているよ。先週読んだ文章で『伊勢物語』の例と一緒に説明されていた、那須野で芭蕉が感動したこと、同じことを言っている部分があるね。

(春子) そうよね。だから、那須野の一節で「かさね」との出会いを引き立たせる工夫をしたのかもしれないよ。

- ① 会話文中に——線④「私たちが今見付けたこの文章にも同じ意味の単語がある」とあるが、どの単語のことか。【Ⅲ】の文章中から一単語で書き抜きなさい。

- ② 会話文中の——線⑤「二つの文章の内容って、この点で似通っている」——線⑥「那須野で芭蕉が感動したこと、同じことを言っている部分がある」という発言をふまえたうえで、【Ⅱ】の文章の筆者と【Ⅲ】の文章の筆者の考えの共通点について説明した次の文の□にあてはまる言葉を、三十五字以内で具体的に書きなさい。

【Ⅱ】の文章の筆者も【Ⅲ】の文章の筆者も、『おくのほそ道』の中で芭蕉は、旅先でこそ引き立つ□と考えている。

- (4) 【Ⅱ】の文章中に——線④「この句はそのイメージを踏まえています」とあることをふまえて、曾良の句について説明した次の文の□A・Bにあてはまる最も適切な言葉を、【Ⅰ】または【Ⅱ】の文章中から、それぞれ漢字四字で書き抜きなさい。

この句は、□Aではかわいい女性のことを撫子にたとえることから、少女の名前「かさね」を「重ね」の意味にとって、この少女はただの撫子ではなく花びらを重ねた□Bであろうと詠じた句である。

- (5) 中学生の春子さんと秋子さんは、国語の授業で【Ⅰ】の文章と【Ⅱ】の文章を読み比べた。そこで芭蕉に興味を持った二人が図書館で芭蕉に関する本を調べたところ、【Ⅲ】の文章を見つけ、次の会話を交わした。この会話について、あとの各問いに答えなさい。

(春子) 先週の授業で読んだ文章では、芭蕉が「かさね」という少女に出会った那須野での体験を描いた一節が、フィクションだろうと言われているって書いていたよね。

(秋子) うん。私たちが今見付けたこの文章にも同じ意味の単語があるじゃない。二つの文章の内容って、この点で似通っているよね。

(春子) ほかに、この二つの文章には何か関連がないかな。

(秋子) 今見付けたこの文章って、芭蕉の理想とする旅について

- (6) 中学生の夏夫さんは、国語の授業で【Ⅰ】と【Ⅱ】の文章を読んだ感想を次のように発表した。この発表で示された夏夫さんの考えに対してあなたはどうか。あなたの考えを百字以上百二十字以内で書きなさい。

ぼくは、松尾芭蕉の『おくのほそ道』が実際の旅と随分違っているということを知ってショックを受けました。はじめから作り事だとわかっている小説と違って、『おくのほそ道』を読む人は芭蕉の旅を体験しようと思っていないのではないのでしょうか。そこうそがまじっているのでは芭蕉にだまされた気がします。
